

批評

常盤博士著「古賢の跡へ」を讀む

武 内 義 雄

古賢の跡へは、大正九年九月から十年一月に至るまで、常盤博士が支那佛跡を踏査された旅行記で、その範圍は朝鮮、滿洲、直隸、山西、湖北、江西、江蘇、浙江の廣きに亙り、その記述は四百頁に近く、百餘の寫眞が挿まれて、裝訂も頗る立派である。博士が北京に到着せられた時、私も彼地に滞在してゐた爲め、従前著作によつてのみ想像した博士の警咳に接し、房山等に陪遊するを得たのは幸であつた。九月の初にその旅行記が完成したから、之を批評せよとて一部を惠まれた。

北京で博士に會晤したとき、その旅行の目的と計畫とを聞いて少からず感動した。由來時間を度外にした佛敎の研究が、近年歴史的に傾いたのはよろこぶべき現象で、支那佛敎史の著作も少しは出版され、研究家も大分ある様だが、廣い支那を單に時代の前後のみで整理する事は不可能で、支那佛敎史の研究には是非とも時間の外に空間の觀念を明瞭とせねばならぬ。博士が久しき間支那佛敎史に潛心されて、此度又支那を實地に踏査された事は確かに有益な事で、之に因て年代の前後に

加ふるに地方的分布が明かにせられたならば、支那佛教史上に一時代を劃する事であらうと思つた而してこの書を惠まれた時、私は渴するものゝ水に對した様に、いち早く讀んだ。私は支那に滞在すること約二ケ年であつたが、その所得をまとめるとしてもこの書の半分もかき得ない。博士が僅か三ヶ月の旅行によつて、この大著を公にし得られた努力は實に驚嘆の外ない。

この書の好評は既に高く、専門家の賛辭も二三の新聞雜誌に掲げられた事だから、門外漢が今更屋上屋を架する必要はないので、私は單に江南佛寺の記述に對する不審を録して此書を惠まれた博士の好意を謝することゝする。

江南佛寺の最初たる建初寺の位置につきて博士は南門外報恩寺の附近と考へられてゐる。なる程報恩寺琉璃塔圖や秣陵集には、報恩寺を以て建初寺及び長干寺の址だとかいてゐるが、宋の周應合

の景定建康志には

吳大帝赤烏十年、爲西竺康僧會建寺名建初、宋有鳳翔集孤山、因建鳳凰臺於寺側、南北朝佛寺攷所引と見えてゐて、鳳凰臺は今の花盞岡の地に當り城内にあるから、南門外の報恩寺とは同じでないらしい。又元の張鉉の至正金陵新志にも宮苑記を引いて、

吳大帝立大市、在建初寺前、其寺亦名大市、南朝佛寺攷所引、

といひ、所云大市は、今の聚寶門卽南門外の西街にある大市橋の位置にあつたと傳へるから、これによつても建初寺が、大市橋の北花盞岡の鳳凰臺に近いことが知られる。（大市橋は今城外にあつて花盞岡と城壁を隔てゝゐるが、これは楊吳の時築かれたもので、吳の時にはなかつた）縣志に梵刹志を引いて

瓦官有二、山上爲上瓦官寺、平地爲下瓦官寺云、

旁有保寧寺、吳建初寺也、

とあるが、大體眞に近いらしい。報恩寺を建初寺の址といふは明以後報恩寺が榮えて後我田へ水を引いたもので、古い記録と合しない。乃て私は博士が報恩寺を建初寺の址と見る説に不審を懷くのである。

次に同泰寺の記述に、同泰寺の位置は、南唐の淨居寺又は圓寂寺、宋の法寶寺とする説と、城北の外廓に近い高臺の上に建つ明改建鷄鳴寺とする説と二つあると博士は述べられた。六朝事跡編類には第一説に當る記事があり、鷄鳴寺の壁には古同泰寺と題して第二説に相當するが、同治年間の編纂に係る懸志には

鷄鳴寺、本梁同泰寺故址、宋爲法寶寺、明洪武廿年改建、名鷄鳴寺、

とあり、又陳作霖の鍾南准北區域志にも同じ記事があつて、梁の同泰寺、宋の法寶寺、明清の鷄鳴

寺は畢竟同じ位置たることが知られる。六朝事跡は宋人の著だから鷄鳴寺に説き及ばぬまで、博士の所云二説は實は一つである。若し鷄鳴寺の外に法寶寺の位置を知ることが出来るならば教へて頂き度い。

清涼寺の記事にこの寺は後周の文益が住した所で、文益は禪家五宗の一たる法眼系の開祖たるに關らず府志等にはその名古に傳へて居らぬと憤慨されてゐるが、通志には明かに

清涼寺、吳順義中建、……南唐文益禪師道場、といひ、縣志にも

南唐時清涼寺文益、所謂法眼鑑也、爲五鑑之第四とあつて、其他の書籍にも文益の事を記したものがあつて、從つて博士は唯府志だけによられたからやつと雜僧の案内によつて法眼正宗清涼堂上圓寂法師の畫讃を見つけ、法眼宗の祖文益と此寺との關係を確められたのだが、今少し廣く地志を検せ

られたら、自ら明かな事實である。六朝事迹には
悟空が此寺に住した事を載せ、江寧金石待訪目に
保大九年後主祭悟空碑と清凉寺悟空和尚碑とを列
してゐる。而して悟空も文益も共に師を同じくし
てゐるからこれ等と僧傳とを比較講究されたら、
文益のこの寺に入つた因縁も、住した年代も、確
實に證せられる筈である。既に明瞭な文益と寺と
の關係に費す紙面を、這んな問題に費して欲しか
つた。猶清凉寺の西南にある古掃葉樓を博士は梁
昭明太子讀書の遺址を傳ふと記されたが何によつ
て知られた事であらう。景定建康志には昭明太子
讀書臺を蔣山即鍾山定林寺の後峰に置いてゐる。
古掃葉樓は龔半千隱樓の處と私は心得てゐる。

牛頭山の位置について博士はいたく迷はれた様
だ。即ち「僧傳には潤州牛頭山とあり、地圖には
南京の南に牛首山があつて牛頭山がない。潤州即
鎮江を重く見るときは、目的の牛頭山は鎮江の南

やら、南京の南やら見當がつかぬ。鎮江の高木氏
に聞けば鎮江にも牛頭山あるをいひ、頗る迷つた
云々」と記されてゐる。然るに顧祖禹の方輿紀要に
は牛首山本名牛頭山と記し、縣志には建梁志を引
いて牛首山は佛書に所稱牛頭山是也と記して、牛
首山即牛頭山なることは明瞭である。又博士は潤
州を鎮江とのみ考へて居られる様だが、唐の潤州
は鎮江に限らぬ、更に廣い地方を指す。元和群縣
志によると潤州の下には丹徒、丹陽、金壇、延陵
上元、句容の六縣があつて、牛頭山は上元縣の南
四十里に配してゐる。即南京の南の牛首山も潤州
の範圍内に當る。博士は又續高僧傳に、牛頭山幽
栖寺及び丹陽南牛頭山佛窟寺と記するを指摘して
道宣は幽栖寺の牛頭山を潤州即鎮江とし、佛窟寺
の牛頭山を丹陽即南京として居るらしく、頗る混
雑してゐると非難されてゐるが、丹陽といつても
潤州といつても畢竟同じ事で、東京市を東京府と

いつたて差支がない様な物である。鎮江に牛伏山といふがあるが、牛頭山のあることは私は知らない。従つて道宣の記事は少しも混雜してゐない様に思ふ。それから又博士は、道宣は幽栖寺にも佛窟寺にも牛頭山の名を尅してゐるが今日は幽栖寺を祖堂山と呼び、佛窟寺を牛頭山と名けて區別してゐるに注意された。然し元和郡縣志にも單に牛頭山のみを擧げて祖堂山をのせず、景定建康志には宋の大明三年牛頭山の南に幽棲寺を建てたが爲めに幽栖山の名が起り、この山が法融の道を得たりし地なるが故に又祖堂山ともいふと記するを見れば祖堂山の名は後世起つたもので唐の道宣の頃には矢張り牛頭山の一峰と見たものであらう。

以上は單に江南佛寺の記述に對する私の不審と思つた點を録したにすぎない。もし理想をいへば當然言及さるべきものが漏れて居たり岐路に走つたと思はれる點も少なくない。従つてこの書が大

變有益で趣味ある著述たるは先輩の定評ある通りだが、又完全にして些の誤りもないものといへぬ然しこの書は旅行先から報導された記事に本づくものだから、材料の足りないのは止むを得ない次第で、よし誤謬や遺漏があつても博士の名譽を毀ふ筈はない。更に第二回三回の踏査が實現されて最後に支那佛教史が完成された時には必ず時代を劃する名著となるに相違あるまい。果して然らば此の書は實に博士の大事業に對する陳勝吳廣で、記念すべき著述といはねばならぬ。私は切に一日も早く博士の大研究が成就して世に出でんことを祈るとともに、此の書を以てその豫報と考へたい。